

・イハク

## “生きられる伝統”としての 口頭叙事詩

——その研究動向を中心にして

田 森 雅 一

一九八〇年代以降、インドの叙事詩研究に新しい潮流が生まれてきている。その潮流をいくつかのキーワードで表わすとすれば、書記性から口頭性へ、テキストからコンテクストへ、派生的視点から生成的視点へ、ということになるだろう。本稿では、“生きられる伝統”としてのインドの口頭伝統・口承文芸 (Oral Literature) の一ジャンルである口頭叙事詩 (oral epics) の研究動向を探ってみたい。(註1)

印度文明における大伝統と小伝統

口頭伝統のみならずインドの文化を考える際に欠かせないのは、インドが南アジア世界 (スリランカ・ネパール・パキスタン・ベンガラデューシュ・ブータン・チベットの一部) の中心に位置し、時間的・歴史的な深度と言語的・宗教的・民族的な多様性を有する伝統的複合国家であるという認識であろう。

そこで次節以降では、このような分析概念や議論のあり方を念頭に置きつつ、叙事詩研究の動向について概観してみたい。

書記性 (literacy) から口頭性 (orality) へ

今日、インドにおける叙事詩研究においては、古典叙事詩 (sanskrit epics)、民俗叙事詩 (folk epics)、口頭叙事詩 (oral epics) という用語が文脈に応じて使い分けられている。古典叙事詩とはサンスクリット語によって文字化された古典籍にルーツを有する叙事詩

）のような過去の文明遺産（古代文字や書承文献）を現代に引き継ぐ複雑で多様な社会の伝統文化を考察する際には、どのような分析概念が有効となるのだろうか。一九五〇年代から六〇年代にかけてのインド研究に大きな影響を与えた人物の一人にアメリカの人類学者レッドフィールドがいる。当初、彼と彼の共同研究者は、一つの文明には「内省的な少数者による大伝統 (great tradition)」と「概して非内省的な多数者による小伝統 (little tradition)」があると考えた。(註2) 前者は哲学者や文学者によって意識的に培われ学校や寺院で学び伝えられ、後者は洗練や改善の対象となることなく村落共同体の無学な生活の中で存続していくものといふのである。このようないい大伝統／小伝統が示す内容は、都市文化／農村文化の対比から、全体社会／部分社会、文字文化／非文字文化のようないい対比に展開される一方、前者の後者に対する優位性・上位性が含意されていたといつてよいであろう。そして、この分析概念にしたがえば、インドにおける代表的文化伝統とは凡印度的でサンスクリット語によつて伝えられるものと考えられてしまうのである。

「概して非内省的な多数者による小伝統 (little tradition)」があると考えた。前者は哲学者や文学者によって意識的に培われ学校や寺院で学び伝えられ、後者は洗練や改善の対象となることなく村落共同体の無学な生活の中で存続していくものといふのである。このよ

うな大伝統／小伝統が示す内容は、都市文化／農村文化の対比から、全体社会／部分社会、文字文化／非文字文化のようないい対比に展開さ

れる一方、前者の後者に対する優位性・上位性が含意されていたといつてよいであろう。そして、この分析概念にしたがえば、インド

における代表的文化伝統とは凡印度的でサンスクリット語によつて伝えられるものと考えられてしまうのである。

であり、民俗叙事詩とはインド各地で伝承されてきた独特な叙事詩伝承のことである。一方、口頭叙事詩とは広く「口頭で演じられる」叙事詩を意味する。

一九七〇年代ころまでの叙事詩研究は、『ラーマーヤナ』『マハーバーラタ』に代表される大伝統的な視点からの古典叙事詩の研究が中心であった。その内容は、古典叙事詩の読解や解釈、構造の分析、刊本・写本系統の分類、および文字資料を中心とする比較文学的な研究が主流であったといえるであろう。

ラーマーヤナ研究の例で考えてみよう。かつてのラーマーヤナ研究の中心は、古代の聖者ヴァーラミー<sup>〔註5〕</sup>によって文字化された『ラーマーヤナ（ラーマの行状記）』にあった。<sup>〔註4〕</sup>すなわち、研究対象となっていたのは文学作品としての『ラーマーヤナ』であり、"生きられる文化"としての口頭叙事詩研究という視点は希薄であった。

そもそも『ラーマーヤナ』は文学作品として書かれたものであつたろうか。ヴァーラミー<sup>〔註5〕</sup>の冒頭部分に、文字化に際しての発端が語られている。聖仙ナーラダが苦行者ヴァーラミー<sup>〔註6〕</sup>の訊ねに応じてラーマの生涯とその出来事を語り聞かせ、最後に、「ラーマの所行を説く人はあらゆる罪障から解放され、子孫とともに、また眷属ともども、天国に赴いて繁栄するであるう」と語りを締め括る。そして、この言葉を聞いた、ヴァーラミー<sup>〔註7〕</sup>は「音節の数が同じで、四つの詩節で組み立てられていて、弦楽器に合わせて歌うことのできるシユローカ韻律の詩（シユローカは一六音節二行の詩句）を作ろう」と決心し、プラフマー神の勧めにより、口頭叙事詩はにわかに脚光を浴びるようになつた。

に従いラーマの行状記を完成させる一方、「音楽に通じて、音の高低と旋律に詳しく、しかも非常に美しい声の持ち主」であるクシャとラヴァの兄弟に『ラーマーヤナ』を教え歌わせたのである。

このように、『ラーマーヤナ』の文字化は記録や文学作品として読まれることを目的としたものというよりは、読みのためのテクストとして書かれたものであると同時に、プロフェッショナルな吟遊詩人が暗唱し歌詠するためのテクストであったことは明らかである。文字化された古典テクストであっても、叙事詩は書記性を追求したものではなく、語り・朗誦・歌詠などを前提としたそれまでの口頭性を継承したものと考えてよいだろ<sup>〔註6〕</sup>う。また、これらの口頭伝統は、口頭伝承と身体伝承の両方を包括し、舞蹈・演劇・人形芝居・絵解き、そしてメロディやリズムの提示を目的とした楽器演奏などのさまざまな芸術様式（パフォーマンス）に支えられて今日まで継承されてきたことを見逃してはならない。

#### テクスト（text）からコンテクスト（context）へ

このような“生きられる伝統”としての口頭叙事詩が注目されるようになったのは、人類学者・民俗学者らが民俗叙事詩それ自身を研究テーマとして現地のフィールドワークを行うようになつてからである。一九八〇年代に入つて、『ラーマーヤナ』『マハーバーラタ』などの古典叙事詩の議論を補完するものとして取り上げられた叙事詩伝統の同時代性に関する研究を経て、詳細な民族誌（monographs）に裏付けられた本格的な民俗叙事詩研究が登場することにより、口頭叙事詩はにわかに脚光を浴びるようになつた。

そして、一九八〇年代の調査研究の蓄積は、九〇年代に入って一気に花開くことになる。まず、大伝統的な視点からの古典叙事詩研究を抜け出し、多様に存在する叙事詩の現在形が探究されるようになつた。アメリカの宗教学者・文学者たちが中心となつてまとめ、「南アジアにおける口承伝統の多様性」という副題がつけられた『Many Rāmāyanas』はその代表であろう。また、インド人の人類学者・民俗学者らがフィールドに入り、インド各地の少数民族や地方の民俗伝統の中で『マハーバーラタ』などのように息づき、語られ演じられ、変容し再創造されているのかを研究報告した。『Mahābhārata in the Tribal and Folk Traditions in India』は特筆に値する。一方、アメリカの人類学者・民俗学者が中心となつてまとめた『Oral Epics in India』には、古典的叙事詩とは必ずしも重ならないインド各地の口頭叙事詩や、それらが口頭で演じられるコンテクストに注目した各種論文が掲載されている。また、日本人研究者たちによつてまとめられた最近の成果としては『ラーマーヤナの宇宙』が注目される。

このような最近の研究動向をまとめるに次のようになるだろう。

- (1) 書記性から口頭性への注目
  - (2) テキストからコントextへの注目
  - (3) 派生的視点から生成的視点への注目
- 最初の動向については、前述した通りである。一番目の動向にはいくつかの異なる視点の研究が含まれている。まず、古典叙事詩をルーツにもつ口承叙事詩あるいはその地方独特な民俗叙事詩が存地

でどのように語られ演じられているか、叙事詩の内容とパフォーマンスに個別に注目する研究がある。また、パフォーマンスを成立させる社会的コンテクスト（叙事詩と共同体のアイデンティティ、演者と聴衆・パトロンとの関係など）に注目する研究も少なくない。<sup>〔註8〕</sup> そして三番目の動向は、古典叙事詩と民俗叙事詩との関係に注目するものであるが、この場合、民俗叙事詩を単なる古典叙事詩からの派生的なものとしてのみとらえるのではなく、民俗叙事詩それ自体を生成的なものとして捉える視点が強調されるのである。<sup>〔註9〕</sup> これらの研究の他に、口頭叙事詩に表象される「構造」やイデオロギーを分析することで叙事詩内容と社会構造・文化認識やカースト、ジェンダーなどとの関係を考察しようとするものや、古典叙事詩がテレビ番組に編成されて全インド的に放送されたり、ビデオ化されて流通するといった近代メディアがもたらすインパクトについて考察したものなどがある。

このように、近年の研究は実に多様であるが、その一例として、ルトゲンンドルフによって書かれた『The Life of Text: Performing the Rāmcaritmānas of Tulsidas』について簡単に紹介しておこう。

### 口頭伝統としてのラーマーヤナの現在

ヴァーリミーキによって文字化された『ラーマーヤナ』は、サンスクリット語によって書かれたものであった。サンスクリットはバラモンを中心とする一部知識人の言葉であったために、インド各地の日常的言語に翻訳・翻案される必要があった。

今日、北インドの人々に最も受け入れられているラーマーヤナの

### 大伝統／小伝統の分離を超えて

テキストの一つは、一六世紀にトゥルシーダースによって翻案された『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの所行の湖）』（以下、『マーナス』）であろう。<sup>〔註1〕</sup> 北インドでは、九月末から十月の初めにかけて、ラーマの生涯をめぐる野外劇ラーム・リーラー（*rām līlā*）が行われるが、この野外劇の台本となるのが『マーナス』である。野外に設営された舞台の近くでは『マーナス』が節をつけて朗詠されたり、リズムをつけて歌詠されたりする一方、その場面内容にふさわしい所作と現代語のセリフによつてラーマの所行が上演される。

ルトゲンドルフは、『マーナス』のテクスト内容それ自体よりも、そのテクストが人々にどのように受け入れられているのか、その社会的・文化的コンテクストに注目し、フィールドワークに基づく詳細な研究を行つた。彼の観察によれば、『マーナス』の歌詠は、個人が三〇日間にわたり毎朝朗詠する場合、個人あるいは家族単位で二十四時間かけて不斷に朗詠する場合、朗詠の専門家を招き家族が部分的に参加して朗詠する場合、空き地に大型のテントを張るなどして朗詠の会が大々的に催される場合などいくつかの形態がある。

人々は、楽器演奏や身体動作を伴うプロのパフォーマンスを堪能するのみならず、自らがテキストを朗詠したり、セミプロ的な有志のパフォーマンスに部分的に参加したりしているのである。このようにテクストは、プロ・アマ問わざ万人に「口頭で演じられる」ことによって“生きられる伝統”として新たな命を吹き込まれ伝承されていく。

レッドフィールドらは後になつて、大伝統の優位性について修正する考え方を明らかにした。彼らが強調したのは二つの伝統の相互依存性、すなわち中心的伝統が周辺に流布されて定着する「局地化（parochialization）」の過程と、局地的伝統が中央に取り込まれて定着する「普遍化（universalization）」の過程の双方向の流れの重要性であった。とすれば、大伝統を原典に立ち戻り「テクスト（文化・構造）」において研究する方向性と、小伝統を日常生活の視点から「コンテクスト（表現・行為）」において研究する方向性の連携が必要になることはいうまでもない。

ラーマースジャーンは、初期のレッドフィールドらの二局化され階層化された伝統概念を批判し、文字化されたテクストが唯一のテクストではなく、あらゆる種類の口頭伝統がテクストとなりえることを指摘した。<sup>〔註2〕</sup> すなわち、身体技法や音楽演奏などを含む非言語的コミュニケーションがテクストを含み、場合によつてはすべての文化活動がテクストとなりうるというのである。もちろん、この文化活動には、口頭叙事詩のみならず民話・笑話などといった日常生活に密着したさまざまの口頭伝統が含まれている。テクストをこのように見なせば、都市／村落、全体的／地方的、文字／非文字、そして文化・構造／表現・行為という分断は生まれず、関連する他方を補正し再定義することが可能となり、一つのテクストは別のテクストのコンテクスト（背景あるいは相互作用を有する連続の一部）でありプリテクト（前テクスト）と考えることができるうことになる。

」のように、今日におけるインドの口頭伝統研究の動向は、大伝統／小伝統という分断され公式化された分析枠組みそのものを脱構し、乗り越えるための試行錯誤の歩みと無関係ではなかったように思われる。もはや大伝統／小伝統という概念を用いて説明すること自体に限界がきいている。テクストとコンテクストの関係性、すなわち文化・構造なるものが個的な表現・行為をどのように規定し、個的な表現・行為の集積が文化・構造なるものをどのようにずらしながらしみるかが今後の課題の一つである。

なお、本稿においては、紙面の都合等から叙事詩研究の動向を中心概観した。インドの民話・昔話の研究動向については機会を改めたい。

## 注釈

- (1) 本稿では、過去に重きをなす文化遺産としての“生きている伝統”と区別するため、現在に重きを置き、実践する個人によって再生成されつつ変容していく伝統文化の意味で“生きられる伝統”を用いることとする。
  - (2) 大伝統／小伝統モデルはレッドフィールド [Redfield 1960] や、彼の共同研究者らの分析概念である。
  - (3) 叙事詩および口頭叙事詩などの定義に関してはブラックバーン [Blackburn & Flueckiger 1992] のイントロダクションを参照のこと。
- (4) 『ラーマーヤナ (Rāmāyana)』は、七篇、二万四〇〇〇シヨローカ (詩頌) からなる。古代の聖者ヴァーラミーキの作とされるが、その原型は紀元前から嶺遊人らによつて口頭伝承されていたラーマ王の歴史的物語であり、今日に伝わる内容に近い形で文書化されたのは紀元二～三世紀ごろと推定されている。
- (5) 『ラーマーヤナ』の日本語訳については岩本「一九八〇」を参照した。
- (6) ヒンドゥー書記性と口頭性は、オング「一九九一」の「oral literary & orality」と対応するものである。なお、oral literature の訳語としての「口承文芸」が抱える問題点等については兵藤「一九九七」を参照のこと。
- (7) 「Beck 1982」「Roghair 1982」を参照のこと。
- (8) 「Schomer 1992」「Blackburn 1992a」を参照のこと。
- (9) 「Blackburn 1992b」を参照のこと。
- (10) 前著の便りトガ「Beck 1992」「Claus 1992」後者の例としては「Lutgendorf 1995」と「Richman 1991」のイントロダクションなどを参照のこと。
- (11) 「トーナス」は北イングランド分布するコンティー語アワード方言に由りて書かれ、七篇、約一万詩頌からなる。この場合の韻律は、数頌の四行詩と一頌の対句の組み合わせを基本とする。
- (12) その点に関する「Ramanujan 1994」のイントロダクションを参照のこと。

- and Culture. Chicago: University of Chicago Press.
- Beck, B. 1982 *The Three Twins: The Telling of a South Indian Folk Epic*, Bloomington: Indiana University Press.
- Blackburn, S. H. 1992a "Core Triangles in Folk Epics of India," in *Oral Epics in India*.
- Blackburn, S. H. 1992a "Context into Text: Patronage in a Tamil Oral Tradition," in J. E. Erdman (ed.), *Arts Patronage in India: Methods, Motives and Markets*, New Delhi: Manohar.
- Blackburn & Flueckiger, et al. (eds), 1992 *Oral Epics in India*, Berkeley: University of California Press.
- Claus, P. J. 1992 "Behind the Text: Performance and Ideology in a Tulu Oral Tradition," in *Oral Epics in India*.
- Lutgendorf, P. 1991 *The Life in a Text: Performing the Rāmcaritmānas of Tulsidas*, Berkeley: University of California Press.
- Press. 1995 "All in the (Raghu) Family: A Video Epic in Cultural Context," in L. A. Babb and S. S. Wadley, (eds), *Media and The Transformation of Religion in South Asia*, University of Pennsylvania Press.
- Ramanujan, A. K. (ed.), 1994 *Folktales from India: A Selection of Oral Tales From Twenty-two Languages*, New Delhi: Penguin Books.
- Redfield, R. 1960 *The Little Community and Peasant Society*
- Richman, P. (ed.), 1991 *Many Rāmāyanas: The Diversity of a Narrative Tradition in South Asia*, Berkeley: University of California Press.
- Roghair, G. 1982 *The Epic of Pālnādu: A Study and Translation of Pālnādu Virūla Katha, a Telugu Oral Tradition from Andhra Pradesh, India*, New York: Oxford University Press.
- Schomer, K. 1992 "The Audience as Patron: Dramatization and Texture of a Hindi Oral Epic Performance," in J. E. Erdman (ed.), *Arts Patronage in India: Methods, Motives and Markets*, New Delhi: Manohar.
- Singh, K. S. (ed.). 1993 *Mahābhārata in the Tribal and Folk Traditions of India*, Indian Institute of Advanced Study (Shimla) and Anthropological Survey of India (New Delhi).
- 金子量重・坂田寅二・鈴木正勝編 一九九八『ヒーリングの文化』藤原書店  
拙著『口承と民族造形』春秋社  
〔訳註稿〕一九九七『口承文學総編』『訳波譲座』日本大學史(筆長編・口承文學一)』訳波譲座  
〔大英・米国文學・印度交流振興基金〕